小杉健郎氏の急逝を悼む

桜井　隆（国立天文台）
e-mail: sakurai@solar.mtk.nao.ac.jp

2006年11月24日（金）13:30より国立天文台・三鷹の会議室で，日本天文学会創立百周年記念出版事業「現代の天文学」の第10巻「太陽」の著者編集者会議が行われた．編集者のISAS小杉健郎，京大・柴田一成，国立天文台・桜井のほか著者10名ほどが集まった．小杉さんは今から思えば普段より元気がなかった気がするが，ここ数年は会うたび腰が痛いと言っていたし，忙しくて疲れているのも普通のことなので特に気にとめなかった．いつもと比べて発言も少なかったが，口絵カラーページの写真の選択などについて的確な意見を述べた後，「取材があるので先に失礼します」といって15時ころ天文台を出られた．これが私にとって最後の姿になってしまった．

そのすぐ後，11月27日からインド・バンガロールで国際太陽系観測年 (IHY) の国際シンポジウムがあり，私は26日（日）朝の飛行機で成田を発ち，夜半にバンガロールに着いた．ホテルでメールを読み訃報を知った．インドには小杉さんと親しい研究者が大勢おり，また小杉さんはIHY国内委員会のメンバーでもあるため，27日の開会式で N. Gopalswamy さんの司会で黙祷を捧げた．

小杉さんは東京大学の大学院で私の1年先輩である．私の結婚式披露宴で司会をお願いしたり，いつでも頼めば引き受けてくれる頼りになる兄貴分だった．大学院から助手時代は野辺山太陽電波観測所を本拠地に研究活動を展開していた．小杉さんが甲斐敬造さんの追悼文（天文月報1991年5月号）に書いているように，突出した性能の装置でないだけに研究成果に結びつけるのはたいへんだったが，そこでの苦労が厳しい研究スタイルを作り上げたと思う．「ようこう」衛星や電波ヘリオグラフなど，楽々論文が書ける装置を前にして，「安易な気持ちでデータを見ていてはだめだよ」とよく言っていた．

「ようこう」衛星最大の成果といわれる，ループトップ硬X線源の発見は，現・名大太陽地球環境研究所の増田　智さんが小杉さんの学生だった頃の仕事である．いつだったか，生協の食堂でお二人の議論を耳にしたことがある．硬X線像の画像合成で残差が思うように小さくならず，どこか較正データにおかしいところがあるのではないかという増田さんに対し，較正データを疑うのは最後のステップで，その前にあらゆる可能性を徹底的に当たってみなさい，というのが小杉さんのアドバイスだった．その結果発見された「Masuda硬X線源」は画像合成と軟X線望遠鏡との位置合わせをやり切った増田さんの努力の賜物だが，小杉さんの慧眼も忘れてはならない．

小杉さんは大勢をまとめていく能力に優れており，国内外の多くの委員会で重要な役割を果たしてきた．論客であり，的を突いた発言で並みいる聴衆をうならせることもしばしばであった．国内では特に磁気圏物理，宇宙天気研究のグループとのつながりを重要視し，太陽地球間物理学全体の振興を図っていた．国際的にも，COSPARの事務局 (Bureau) 委員を務めるなど，日本のスペース天文学の代表として活躍された．

「ひのとり」，「ようこう」の硬X線観測は小杉さんの得意とする分野だが，マネージャーを務めた「ひので」の研究分野はそれとは少し離れていた．将来は再度高エネルギー物理に帰ろうとしていたか，あるいはもっと大きな天文学全体のことを考えていたのか，今となっては知ることができない．ご冥福をお祈りする．